

教育を生産労働とむすびつける

教育を生産労働とむすびつける

1958年10月 初版発行

出 版 者 外 文 出 版 社

中 華 人 民 共 和 国
北 京 阜 成 門 外 百 万 荘

編号：（日）7050—9

教育を生産労働とむすびつける

陸 定 一

外 文 出 版 社
北 京

出版者のことば

この文章は中国共産党中央政治局委員候補陸定一氏が、党中央の召集した教育工作会议の結論にもとづいて書いたものです。

文章のなかに出てくる歴史上の人物には、読者の理解をたすけるために注をつけてあります。

教育を生産労働とむすびつける

陸 定 一

今年のはじめから、わが国の教育事業はめざましい発展をとげている。国家統計局の概算によると、全国には六月末げんざいすでに、小学教育の普及した縣が一二四〇縣、民間経営の中学校が六万八〇〇〇校、地方で新たに設けた大学・専門学校が四〇〇あまりをかぞえ、また文盲一掃の学習には全国で九〇〇〇余万人がくわわり、四四四の縣がはやくも大体において文盲をなくしている。整風運動とブルジョアジーの右派に反対する闘争の勝利によつて、わが国工業生産の大躍進がもたらされた。工農業生産の大躍進はまた、技術革命と文化革命の高まりをもたらしした。教育事業の大発展は、文化革命の高まりをしめす標識のひとつである。

昨年末と今年のはじめに、教育事業の発展をうながす二つの措置がこうじられた。その一つ

は全国の学校が働きながら学ぶ制度を実施したことであり、もうひとつは農業中学校の創設である。働きながら学ぶ制度によつて、一般の学校の教育が生産労働とむすびつけられるようになった。一般の学校の、肉体労働を軽視する長年らしい傳統がうちやぶられ、学校の氣風が改まるとともに、いつぱん社会の氣風にもひじょうに良い影響をおよぼした。農業中学校は半工半読の民間経営の職業（技術）学校である。こうした学校は一方で生徒の上級学校への進学の要求をみたしつつ、他方で、農業生産のために技術人材を育てることができし、また設立がわりに容易なうえに、目の前の実用にもびつたり合い、政府の金を使わなくてすむうえに、生徒の家庭の経済的な負担も少なくてすむ。そんなわけで、ひとたび提唱されるとすぐにあつちでもこつちでもつくられ、何カ月かのあいだに何万という農業中学校ができた。小学校卒業生の進学の心配がなくなつたので、民間経営の小学校も大いに発展し、少なからぬ省、市、自治区で急速に小学教育がゆきわたるようになった。生産発展の必要から成人教育もさかんとなり、文盲一掃運動の高まりがみられるようになり、さまざまな業余の文化・技術学校もおびただしい数のものがあらたにつくられた。文化革命のこの高まりは、農村から都市にひろがつて

ゆき、都市では、学校が工場を経営し、工場が学校を経営する風潮が生まれた。学校教育が生産労働とむすびつくようになったので、学校ではまた学課改革運動がおこり、学制改革の試みや教師の隊伍の改組その他がおこなわれるようになった。われわれの教育事業は、文字通り百花咲きはこり、万馬空をゆく観を呈している。いまや教育事業は、専門家だけがこれを一手にひきうけてやるものだといった傾向や、教條主義の枠をつきやぶつて、全党、全人民こぞつて学校をおこすという、わが国の事情にびつたり合つた社会主義の教育事業となろうとしていく。こうした改革は共産党の指導のもとに実現されたものである。「より多く、よりはやく、より良く、より経済的に」という方針は教育にはあてはまらぬ」とか「素人は玄人を指導できない」とか「共産党委員会は教育のことはわからない」とか「大衆は教育のことはわからない」等々といったまちがった議論は、いま徹底的にうちくだかれている。

わが国はプロレタリアート独裁の国であり、社会主義の国である。わが国の教育は資本主義の教育ではなく、社会主義の教育である。共産党の指導がなかつたら、社会主義の教育など思ひもよらぬことである。社会主義の教育は、ふるい社会を改造し新しい社会を建設する有力な

手段のひとつである。社会主義革命と社会主義建設の目的は、すべての搾取階級と搾取制度およびその残りかすを一掃し、おのおのがその能力におうじて働くとともに必要におうじて取り、都市と農村の差別、頭脳労働と肉体労働の差別をなくした共產主義社会を実現することにある。この目的はまた社会主義教育の目的でもある。こうした教育はプロレタリアートの政党である共産党だけが指導できるのであつて、ブルジョアジーはこうした教育事業を指導する資格はない。共産党の指導のもとにあつてはじめて教育の面に、こんなにちわれわれが見るようなこうした新しい氣風がうまれたのである。

この数年らい、教育方針の問題をめぐつて長い論争がつづいた。今年の四月と六月に中共中央の召集した教育工作會議で、一連の理論上の問題と實際上の問題が解決された。

中国共産党の教育方針では、一貫して、教育は労働者階級の政治に奉仕するもの、生産労働とむすびつけられるものとなつてゐる。この方針を実現するためには、教育はかならず共産党によつて指導されなければならない。この方針はブルジョアジーの教育方針とまづこうから対立している。ブルジョア教育は、ブルジョア政治家の指導をうけるもの、ブルジョア政治つま

りブルジョア独裁に奉仕するものであつて、プロレタリアート独裁とはあい容れない。社会主義制度のもとでは、ブルジョアジーも、教育はブルジョア政治家の指導を受け、プロレタリアート独裁反対の手段にならなければならぬというようなことを直接あからさまに言い出すことができない。そこでかれらは、やむなく「教育は専門家が指導すべきだ」とか「教育のための教育」などといったごまかしを言い張ることによつて、教育をプロレタリアート独裁に奉仕させまいとする目的をとげようとしているのである。したがつてわれわれの社会主義国では、ブルジョアジーの教育方針は、教育のための教育、頭脳労働と肉体労働の分離、教育は専門家の指導を受けるなどといった形であらわれている。

教育は第一に知識を教え、知識を学ぶことである。だが、知識とは何か。また教え、学ぶことの目的は何か。こうした問題について、われわれ共産主義者の理解は、ブルジョアジーの理解とちがつている。大多数のブルジョア教育学者は、書物のうえの知識だけが知識であつて、実践のうえの経験は知識のうちにはいらないと考えている。そこで彼らの考えによると、教育とはすなわち読書であり、たくさんの書物を読んだものほど知識が多く、書物のうえの知識を

もつものはほかのものより一段すぐれているのである。生産労働、なかでも肉体労働と肉体労働者はいやしいもので、「前途の見込がない」のである。このほか、ブルジョア教育学者のなかには、教育とは生活であり、生活すなわち教育であると考えているものもある。彼らは生活を階級闘争とも生産闘争の実践とも考えていないうえに、理論の重要性も強調しないので、事実上教育を否定することになっている。ブルジョアジの上述の二つの観点は、絶対的にあい反したもののように見えるが、実は一つの共通した源から出ている。彼らは、人間には階級の区別はなく、教育学は階級を超越した学問だというのである。

われわれ共産主義者の見方はこれとはちがう。われわれは、教育学は社会科学だと考えている。すべての社会科学は政治についてゆくものであつて、教育学も例外ではない。人間に教育が必要なのは、階級闘争をやり、生産闘争をやるためである。われわれは、世界にはただ二つの分野の知識があるだけだと考えている。ひとつは階級闘争についての知識である。階級闘争は経済的な地位のちがいにともづく人間集團の間の闘争であつて、こうした闘争は何千年も前から存在している。げんざいわが国の過渡期にあつては、まだ階級闘争がある。將來、階級が

なくなると階級闘争はなくなるが、しかしそれでもまだ人民内部の矛盾というものがあるのだ、一万年たつてもやはり毒草はありうることになる。ことばをかえていえば、真理と誤謬のあいだの闘争、すすんだものとおくれたもののあいだの闘争、生産力の発展にたいする促進派と促退派のあいだの闘争などがやはりありうるのである。もうひとつは生産闘争についての知識であつて、これはつまり人類が自然と闘争するうえでの知識である。そして哲学はこの二つの分野の知識についての概括であり、総括である。哲学が重要なのは、弁証法的唯物論の哲学が正しい思想方法をあたえるからである。人びとのあいだの本質的な区別は、「氣質」や性格のちがいにあるのではなく、まず第一に階級的立場のちがいにあり、つぎには思想方法のちがいにある。階級的立場と思想方法は互いに連けいをもつとともに、またそれぞれにことなつたところをもつてゐる。誤りはたいてい二つの源から生まれるものであつて、ひとつは階級的な源、ひとつは思想的な源である。大きな誤りをおかさないようにし、また誤りを少なくするためには、政治を学び、哲学を学ばなければならない。われわれ共産主義者はまた、一面的な不完全な知識には二つの種類があるとみている。實際活動からまつたくかけはなれた書物のうえ

の知識は、一面的な不完全な知識である。毛沢東同志はこう言っている。「学生たちの書物のうえの知識とはどんな知識であろうか？ かれらの知識がかりにみな真理であつたとしても、それはやはりかれらの先人たちがその生産闘争と階級闘争の経験を総括してかきあげた理論であり、学生自身がみずから体得した知識ではない。彼らが、これらの知識をうけいれることはまづたく必要なことである。だが、一定の事情のもとでは、これらの知識もかれらにとつてはなお一面的な知識であり、他人が証明したものであつて、かれらにとつてはまだ証明されていないものだということを知らなければならない。いちばん大切なことは、これらの知識をうまく生活と実際に適用することである。だから、わたしは、書物の上の知識をもっているだけで、実際というものに接触したことのない人もしくは実際の経験をそれほどもっていない人には、自己の欠点をはつきりと知り、自分の態度をいまずし謙虚にするようすすめている。」理論に欠けたり、感性的なまたは局部的な経験にかたよるのも、一面的な不完全な知識である。毛沢東同志はつぎのようにのべている。「実際活動にたずさわっているわが同志たちが、自分の経験をまちがつて適用するならば、これもまた弊害をうむであろう。たしかに、こうし

た人びとはしばしばすこぶる豊富な経験をもっているが、これはひじょうに貴重なるものである。しかし、彼らが自分の経験だけに満足しているなら、これまたきわめて危険である。かれらは、自分たちの知識が、感性的なまたは局部的なものにかたよつていて、理性的な知識と普遍的な知識に欠けていること、つまり、理論に欠けており、その知識がまた比較的不完全なものだということを知らなければならない。ところで、革命事業を立派にやつてゆくには、比較的完全な知識がなければどうにもならないのである。」では比較的完全な知識とはどんなものか。毛沢東同志はこう言っている。「ほんとうの理論は、世界にただ一つしかない。それは、客観的實際のなかからひきだされ、そしてまた、客観的實際によつて証明された理論であつて、このほかには、われわれのいう意味での理論というものは何もない。」「比較的完全な知識は、すべて二つの段階からなりたつてゐる。つまり、第一の段階は、感性的な知識であり、第二の段階は、理性的な知識である。理性的な知識は、感性的な知識のより高い発展段階である。」「不完全な知識には二つの種類があり、そのひとつはできあがりの書物のうえの知識であり、もうひとつは感性的なものや局部的なものにかたよつた知識であつて、この二つの

知識はともに一面的である。この二つを結びつけることによつて、はじめてりつばな、比較的完全な知識が生まれるのである。」（毛沢東選集第三卷「党の活動態度をなおせ」より）。教育の目的は、学生に比較的完全な知識をえさせることであつて、一面的な不完全な知識をえさせることではない。したがつて、教師の方でも比較的完全な知識をもつようにしなければならないのである。

わが国の教育関係者は「教育は人民の事業である」とよくいう。これはよいことである。なぜなら、わが国ではこれは真理だからである。だが、九年間の経験からみて、この言葉についても二とおりの解釈がある。ブルジョア教育学者は、教育を受ける権利なら人民大衆にも与えなければならぬが、教育の運営の方は専門家がやれるだけで、人民大衆は口を出すかぎりではないと考えている。「学校の運営は教授がこれをおこなう」、「素人は玄人を指導できない」、「共産党には教育のことはわからない」、「大衆には教育のことはわからない」、「学生は先生を批判してはならない」等々というのが彼らの合言葉である。いちぶの同志は、ブルジョア教育家がまきちらすこうした迷信をもはんとのことと信じてんでいるが、この人たちは、わが党

がいままで何千遍、何万遍も「素人」「素人」と言われながら、最後にはどんな玄人よりもつと玄人であることを事実がいちいち証明したことを忘れていたのである。いちぶの同志はこういうことを主張している。第一は、学校を運営できるのは政府だけだという主張、第二は、全日制の正規の学校だけをつくるべきだという主張である。こうした主張がブルジョア教育学者をよろこばせることは、経験が証明している。なぜなら、こうすれば、大衆の手足をしばりつけて、大衆による学校の運営ができなくなるからである。こうした主張にしたがつて教育をやるとすれば、政府はぼう大な経費の負担にたえられず、生産の面でも大きな損失をこうむるので、中・小学教育の普及はひじょうに困難となり、高等教育の普及などまったくのぞめなくなることをブルジョア教育学者はよく知っている。われわれ共産主義者はブルジョア教育学者とはちがう。われわれの見解によれば、人民大衆は社会主義革命と社会主義建設のために教育事業を必要としているのである。人民大衆は革命も建設もやれるのだから、教育をうけることだけでなく、教育を運営することもできるはずである。教育の運営は専門の隊伍にたよらねばならず、強大な専門の隊伍がなくてはやつてゆけない。そして、今日でも幹部を轉勤させ、師